

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第二号
平成二十八年三月一日発行（抜刷）

論文

宝卷と道教の煉養思想について

松馬

下

道西

信沙
訳

宝卷と道教の煉養思想について

馬 西 沙
松 下 道 信 訳

□ 要 旨

本論考は、まず道教の基本的特性がその哲理と内丹の煉養の実践とが結びついている点にあると考える。そして明清時代の民間宗教の宝卷はこうした特性に大きく影響を受けており、それは次第に道教が下層階級に影響を及ぼす一つの回路になったと指摘する。あわせて本論考は道教と民間宗教との煉養思想の異同についても分析する。

□ キーワード

宝卷 道教 三教応劫思想 内丹 民間宗教

中国本土の文化としての道教は広範にして奥深い内容を持ち、その中にはあらゆるものが含まれる。その最も根源的な特徴は、深遠なる哲理と煉養「内丹の修養」という実践活動を一つに融合した点にあり、一種の体と用を兼ね備え、世俗にありつつも同時に世俗を超越した学問を作り上げた。

道教は強靱な生命力を持ち、その深遠な教理においてのみならず、またそれが民間の文化と密接に関連していることから、何千年にもわたりその滋養を受け、

また逆に各種の民間の文化に深く影響を及ぼしてきた。その中には民間宗教も含まれる。明清時代、各種の民間の教派は、道教の啓発と助けを受けていないものはほとんどなく、とりわけ内丹道の煉養思想の影響をうけている。民間宗教の教義を記した「宝卷」は、豊富にして膨大な煉養思想を含み、道教が下層階級の民衆へ影響を及ぼす媒体の一つとなった。

一、「宝卷」について

中国の伝統的な宗教経典は膨大であり、仏教経典や『道蔵』以外にも、また分量や種類が数多い「宝卷」がある。統計によると、現存する「宝卷」だけでも千種以上に及び、ここには内容的に近似する異なる版本は含まれない。この中には相当な種類の勸善書が含まれているが、民間宗教の教義である宝卷もまた二三百種類含まれている。もしもこれをあわせたならば、『宝卷集成』を作ることができるとは言えない。

宝卷の始まりは、主として唐・五代の変文および講经文により生み出された一種の宗教思想伝達のための芸術様式であった。それらの多くは韻文・散文を交えて構成され、ある巻物は時に語り、時に歌い、人々の耳目をひきつけたのである。

我々が把握している史料から見て、最初の宝卷は、仏教が世俗の人々のために説法した通俗的な経文、あるいは宗教的な色彩の濃い世俗の故事の種本であった。僧侶たちはこうした宝卷を使って、因果や輪廻を宣伝し仏法を宣揚したのである。元版の『仏説楊氏鬼繡紅羅化仙哥宝卷』や、鄭振鐸所蔵の『目連宝卷』の出現は、その証左である。宝卷が形成される過程の中で、また道教の影響を受けるようになり、南宋の理宗は善惡の報いについて述べ立て、「扶助正道、啓發良心（正しき道を助け、良心を啓発し）」、広く勸善書の『太上感應篇』を推奨し、後の『陰騭文』や『功過格』の広範な普及と宝卷のような勸善書の興起の先駆けとなった。

少なくとも明初にいたると宝卷は、すでに民間宗教により利用され、教義を伝達する様式となった。現存する、大陸の研究者路工先生所蔵の古い卷子本『仏説皇極結果宝卷』には、明・宣德五年（一四三〇）孟春吉日に刊刻された。この宝卷は無為教主の羅夢鴻の『苦功悟道卷』などの五部の宝卷より八十年前も前に刊行されている。筆者は鄭振鐸先生の蔵書を閲覧し、明版の『正信除疑無修証自在宝卷』・『巍巍不動太山深根結果宝卷』の中に「圓覺寶卷作證（円覚宝卷を証拠とする）」、「金剛寶卷作證（金剛宝卷を証拠とする）」、「彌陀寶卷作證（弥陀宝卷を証拠とする）」、「圓覺寶卷云（円覚宝卷にいう）」、「圓通寶卷云（円通宝卷にいう）」といった内容を見いだした。これは、羅氏五部宝卷が刊行された正徳四年（一五〇九）以前にまとまった量の宝卷が刊行されていたことを有力に物語っている。この中の『仏説円覚宝卷』と『銷釈円通宝卷』はともに民間宗教の經典である。

明代中末葉は民間宗教が隆盛した時期であり、宝卷が大量に撰述刊行された時期でもある。弥陀浄土宗と天台宗の影響の下、生まれたとされる白蓮教はもはや支配的な地位を占めていなかった。代わりに禅宗と道教の内丹派の影響を受けた新しい形の民間宗教が多数出現し、この時代の民間宗教の特徴となった。明末清初に刊行された『古仏天真考証龍華宝經』の記載だけを見ても、老子教・涅槃經・無為教・黄天教・弘陽教といった十八の大きな教派が現れている。だがこれだけ

ではこの時期の民間教派の盛行ぶりをとらえるにはほど遠い。『明実録』などの資料によれば、当時の状況は「有一教名、便有一教主（一つの教派があれば、一人の教主がいる）」⁽¹⁾といい、「此在天下處處盛行、而畿輔爲甚（これらは天下の各地で盛行しており、特に畿内が甚だしく）」⁽²⁾、「甚至皇都重地、輒敢團坐談經、十百成群、環視聚聽（挙句の果てには皇都や重要な土地でも集まって座り、経卷について談義し、何十人何百人と寄り集まってはそれを見聞きしている）」⁽³⁾、「游食僧道十百成群、名爲煉魔、蹤跡詭秘、莫可究詰。……白蓮・紅封等教名各立新奇名色、妖言惑衆、實繁有徒（徒食の僧道が何十人何百人と群を成し、煉魔の名目であちこちで不思議なことを騙り、糾問できない。……白蓮・紅封といった教門はそれぞれ新奇な題目を並べたて、妖しげな言葉で民衆を惑わし、実に多くの信徒がいる）」という具合であった⁽⁴⁾。そしてほぼ全ての實力ある民間教派はどれも宝卷という名目で、みずからの經典を撰述し、刊行した。清代の黄育榎は、「每立一會、必刊一經（一つの会ができるごとに、一つの経卷が刊行される）」と述べている⁽⁵⁾。だが実際には一つ会を建てるごとにたくさん種類の経卷を刊行していたのであり、それらは少なれば数部、多ければ数十部刊行されていた。現在見ることができる明刊本の民間宗教の宝卷は百部を下ることはなく、その多くは大字折装本であり、印制は精巧で美しく、「經皮卷套、錦緞裝飾（経卷の表紙や仕立ては錦織の装幀で）」、正統的な仏教經典とன்ற異なることはなかった⁽⁶⁾。

明中末葉、民間宗教の諸教派は大量の美しい宝卷を刊行したが、それはその巨大な實力と密接に関係していた。例えば、東大乘教は教主の王森に信者が二百万おり、十数箇所⁽⁷⁾の莊園を有し、あちこちに講經所が設けられていた。さらに賄賂という手段を使って王皇后の兄の王偉と同族となり、後ろ盾とした。一方、弘陽教は宦官を後ろ盾とし、經典の多くは皇族の内経廠から発行され、信者の宦官により監督・作成された。当時、宝卷を刊行していることで最も有名であった京城の党家庵書舗もまた極めて権勢を持つ者をその後ろ盾としていた。明代の宝卷の

印刷が美しく、数量が膨大であるのも無理はない。明清の数百年間に、宝巻の刊行を専業としていた書行・書舗は百三十余家を下らない。ある宝巻は何度も刊行され、無為教の五部の宝巻などは、我々の簡単な統計で、異なる版本が二十種以上ある。万曆四十六年（一六一八）、無為教徒が南京で所有する版本だけで九六六塊に達する。また信者が関係する人のつてを伝って、經典を『大蔵』に入蔵させようとしたが、当局に見つかり、「令掌印僧官當堂查毀（責任ある僧官にその場で調査・破棄させ）」、あわせて「毀無為教告示」を發布した。これは当局が宝巻を取り締まった比較的早い記録である。⁶⁾

清代、専制的な統治はさらに苛酷さを増し、当局の目には宝巻は「妖書」や「邪説」と同義語に映るようになった。清・順治二年（一六四五）、当局は陝西で『皇極金丹九蓮正信帰真還郷宝巻』を発見した。清の雍正年間にはさらに大量の宝巻が流通していることを発見した。このため、宝巻の捜査・押収は民間宗教を弾圧する重要な手段となった。「邪教」が摘発されるたびに、すべて没収した宝巻は軍機処に送られ、あるいは皇帝・皇后の目に供され、禁止・焼却されて「以滌邪業（邪惡な所行を濯いだ）」のだった。今日、我々はわずかばかりだが、膨大な清代の檔案の山の中から歴史をかくぐり、損傷を受けていない宝巻を見つけることができる。というのまたえ清代の圧政下でも、歴朝にわたり、やはり宝巻を私的に刊行する書局があったからである。明代の有名な党家庵書舗は、少なくとも清・乾隆五十五年（一七九〇）まで依然として宝巻を密かに刊行し、販売していた。⁷⁾ 江南の蘇州では、康熙四十一年（一七〇二）から乾隆三十九年（一七六八）に当局により押収されるまで、書舗六家が宝巻を六十六年の長きにわたって刊行・販売している。⁸⁾ また嘉慶年間には、江西・湖北の大乗教徒が密かに無為教五部經および『龍牌宝巻』・『天縁結經録』など、多くを刊行している。⁹⁾ つまり宝巻の私的な刊行・販売は清代の歴史の最初から最後まで一貫して見られる現象なのである。道光年間以降は内憂外患が激しさを増し、当局は旺盛な民間の宗教活動

にかかずらう暇がなくなり、宝巻の刊行や流通はさらに野火のごとく広まり、一度それが起きれば収拾することはできなかった。このため直隸官僚の黃育榿はついに専門書を著し、宝巻を滅ぼすことをみずからの責任とするにいたった。清が滅亡する頃には、各種の勸善書を販売する書局は雨後の筍のように現れて全国津々浦々に至るまで及び、宝巻の刊行や重版は最高潮を迎えた。

二、宝巻に含まれる道教の煉養思想

宝巻に含まれる思想はきわめて雑駁であり、儒仏道といった伝統的な文化を交えつつ、歴代にわたって蓄積してきた民間宗教の思想資料や、さらには民間の神話・風俗・儀礼・道德的規範といった内容までも含んでいる。道教についてはいえば、その影響はやはり多方面に及ぶ。道教の哲学・煉養・齋醮・神話伝説はどれも多くの宝巻へと深く浸透している。その中でも道教の内丹術および齋醮儀礼の宝巻への影響が最も大きい。

明初の『仏説皇極結果宝巻』は現存する初期の民間宗教の経巻であるが、現在のところ依然としてどの教派あるいは教門のものであるか判別しがたい。この宝巻の特徴は仏道二教を融合し、外面的には仏教を、内面的には道教を説き、また三教応劫救世思想を交える点にある。だがその中身を見ると、修煉による成道を希求し、この世から超脱する良方を求めることにある。「收圓聖金丹、離天初下凡、有緣同歸去、無分混人間（聖なる金丹を完成させ、天からはじめて俗界に生まれ落ちてより、縁有る者は共に帰り行き、その分がない者は世俗に止まる）」というわけである。経巻では修煉の困難さと修行を成し遂げた際の結果が仄めかされる。すなわち修行者には十歩の功があり、その一歩一歩に関門があるのであり、「有七山關、天元祖、地花母提調。六合神、三十六位守把。逢陽月一五、陰月三七開關。各所眞兌、方許過關。到此地終嶽的三災八難（七つの山関については、

天元の祖、地花の母が指図をする。六合の神は三十六柱が守護する。陽月の一五、陰月の三七に関は開く。この時、各処の真兌においてはじめて関を越えることができるだろう。この境地に至つてようやく三災八難を避けることができる」。この経巻は天地人が一つになることを説くのであり、「人修天地天養人、凡聖相接人不明、天地原是人根本、人稟天地要出身、修行内裡藏時度、聖攝凡提煉兩輪。十歩修行不知道、胡修千年只是空（人は天地のあり方を修養し天は人をはぐくむが、凡夫と聖賢がつながっていることを人は理解していない。天地はもともと人の根本であり、人は天地のあり方をこの身に受けてこの身より超脱する。修行の中には時があり、聖賢は手を差し伸べ、凡夫は向上し、両輪ともに修煉する。十歩の修行を知らないならば、千年の修行もむだとなる）」。この経巻の出現は、我々に次の一つの事実を告げている。すなわち少なくとも明代初葉には、内丹道がもう民間宗教の教義に影響を与えているということである。『仏説皇極結果宝巻』の内容は晦渋で難解なことが多く、名詞や術語は道教と非常に異なるが、修煉の内容は明らかに内丹道から示唆を受けている。

『仏説皇極結果宝巻』が現れて百二十年後、北直隸に黄天道という一つの教えが出現した。顔元は『四存編』「存人編、卷二」の中で「自萬曆末年添出個皇〔黄〕天道、如今大行、京師府縣、以至窮郷山僻都有（万曆末より黄天道というものが現れ、いま大流行し、京師、府や県、片田舎や山村に至るまでもどこでもある）」と述べている。顔元の記載には誤りがあり、黄天道は決して万暦年間の末に出現したのではなく、明の嘉靖年間、直隸の懷安県の人、李賓により桑干河のあたりで開かれた。李賓は、道号を普明といい、人々は普祖または普明虎眼禪師と称した。日本所蔵本『虎眼禪師遺留唱経』には次のように記載されている。

普祖乃北鄙農人、參師訪友、明修暗煉、悟道成真、性入紫府。蒙玉清敕賜、號曰普明虎眼禪師、設立黃天聖道、頓起渡世婆心、燃慧燈於二十四處、駕寶筏於膳地宣雲、遺留了義寶卷・清淨真經。（日本・沢田瑞穂『増補宝卷的研究』、国書刊行会、一九七五年、三四九頁）

普祖は北方の僻地の農民であったが、明師道友の下に参じ、日夜修煉を積んで、悟道して真人となり、その境地は仙界へと至った。玉清の勅旨を賜ったことにより、普明虎眼禪師と号し、黄天聖道を打ち立て、この世を救わんという慈悲の心をすぐさま起こした。二十四個所に智慧の灯をともし、宝の筏に乗って膳房堡・宣化・雲州にやって来て、『了義宝巻』と『清淨真經』を残した。

顔元は黄天道の教義を解釈しようとしたが、ほとんど理解できなかった。彼はいう、この教えは「似仙家吐納採煉之術、卻又說受胎爲目蓮僧、口中念佛（道教の吐納採煉の術を行うように見えて、また受胎を目蓮僧であると説き、口の中で念仏を唱える¹⁰）」。これはまさに黄天道が仏教を信じているように見えて、実は道教的な修行をしているという特徴を指摘したものである。開祖の李賓は青年時代、辺境警護の軍人であったことがあり、その後軍隊を辞めて修行をはじめ、数十年間にわたり山西と直隸北部で明師の下に参じた。嘉靖三十二年（一五五三）、順聖川で「明人」と出逢い、「玄関卯酉の功」を喝破した。嘉靖三十七年（一五五八）、『普明如来無爲了義宝巻』を説く。晩年は万全衛の碧天寺に身を寄せ、修行と伝道を行った。「懐胎九載、鍛煉真心、三關九竅、一氣相同、躲離塵世、逍遙自在行（九年にわたり懐胎して真心を鍛錬し、三関九竅は一氣と貫通し、塵世を離れ、逍遙する様は自由自在であった）」というが、それはまさに李賓夫婦の碧天寺での修道時のスケッチである。李賓の死後、彼の妻と娘および李氏の家族が引き続き伝道を行った。李氏の家族が亡くなると、信者たちが伝教を引き継ぎ、二十世紀中葉に途絶えるまで、その伝播はまるまる四世紀続いた。

黄天道の教義の根本は、人類に長生久視の道を指し示そうとするもので、それは天に円欠なく、人に生死なく、飢えも寒きもなく、染も汚もなく、去来は意のままに自在であり、「壽活八萬一千歳、十八童顏不老年（寿命は八万一千歳にも及び、十八歳の童顏のまま年老いることがない）」というような境地であった。そしてこの境地に到達できる唯一の方法こそ内丹の修煉であった。

黄天道には「九經八書」が伝わるが、中国・日本・ロシアに合計六部現存し、その内、懺儀經文一部を含む。懺儀一部を除けば、五部宝卷はどれも内丹の修煉を本旨とする。創教時の經典である『普明如来無為了義宝卷』には創教の意味を明示し、信徒にこのように戒めている。

修行人、要知你、生來死去、依時取、合四相、晝夜功行、運周天、轉眞經、無有障礙、功圓滿、心花放、朗耀無窮。坎離交、性命合、同爲一體、古天真、本無二、一性圓明。（『普明如来無為了義宝卷』第一分。この經卷はロシア・サンクトペテルブルグ東方学研究所に所蔵されている。）

修行者よ、汝に教えよう、生は来たりて死は去らん。天の時に従い、四相「生住異滅」を合し、日夜修行につとめよ。周天をめぐらせ、眞經を奉じれば、障礙なからん。功行が満ちれば、智慧の心が現れ、その耀きは計り知れぬ。坎離は交わり、性命は合し、ともに一体とならん。いにしえの天仙も、もとはみな同じ、ただ一性が円かであるばかり。

こうした「性命兼修」・「晝夜功行」の目的は丹を結ぶためであり、「三心聚、五氣朝、輝天現地。採諸精、合一粒、晝夜長明（三心が集まり、五気が朝元すれば、天地に輝き現出するだろう。諸精を採取し、一粒の金丹を煉れば、晝夜の別なく光り輝くことだろう）」、「性命合、同一粒、黄婆守定。結金丹、九轉後、自有神通（性命は一つになって一粒の金丹になり、黄婆はそれを守り通す。金丹を結び、さらに九回煉成すれば、おのずと神通力を獲得するだろう）」という。¹¹黄天道から見れば、性命を双修することは、生命の旅に逆らって進む一つのプロセスなのであり、それは老衰や死に対する一つの闘争であり、生命の本源——天眞の性への飽くなき追求であり、こうした追求の果てに金丹が結ばれるのである。彼らは一度金丹が煉成し終われば、凡と聖、生と死の境界を打破し、いわゆる「還丹一粒、神鬼難知、超凡入聖機、包裹天地（一粒の還丹は神も幽鬼も知りがたく、これは俗界を超えて聖境へと至るきっかけであり、天地をすべて包み込め）」み、「牟尼寶輦上崑崙（牟尼宝が崑崙山へと

駆け上がる）」と、「赴蟠桃永續長生（蟠桃会に行き、とこしえに生きる）」と考えた。

長生の道を歩まんとするならば、まず求められる条件は私欲を廃し、ずっと心身を清浄に保つことである。『普明如来鑰匙宝卷』は修行者が一日中、常に清浄を保たねばならないと戒めている。すなわち、「靈臺に物無し」とは清を、「一念も起さず」とは浄のことであり、神は氣の宅であり、心は神の舎である。意念を專一にすれば神も專一になり、神が專一ならば体内の元氣が集まる。機が至れば、静から動へと変化し、神は風のごとく転ずる。三関九竅を貫通し、一種の天地と劫運を同じくする効果を産み出す。人は宇宙のひとつの雛形であり、宇宙は人が拡大したものであり、両者はもともと一体である。このため天地の精氣を採り、体内に取り入れて用いるというのが修行の肝心な部分となる。さらには人体というこの鼎炉は日月星三光の精氣を藥物せねばならないと考え、「採取日精月華、天地眞寶（太陽の精と月の英華、天地の眞宝を採る）」、「晝夜家、採取它、諸般精氣、原不離、日月光、諸佛之根（晝夜家にてそれを採り、もろもろの精氣は、もとわが身を離れず、太陽と月の光は諸仏の根源）」、「採先天混源一氣、煉三光玄妙消息（先天混源の一氣を採り、三光の玄妙な代物を煉成する）」と述べられている。¹³

清初に現れた『太陽開天立極億化諸神宝卷』は上で述べた内容をさらに誇張し、「太陽乃天之陽魂、太陰乃地之陰魂也。天地爲雞卵、乾坤日月乃玄黄大道（太陽は天の陽魂、月は地の陰魂である。天地は鶏卵のようなものであり、天地日月が大道なのである）」という。太陽と月は「乃爲靈父聖母、產群星如蛾布子（靈父と聖母に他ならず、蚕蛾が子を生むように群星を産み出す）」のであり、「人自生之前、原來佛性、始乃太陽眞火（人が生まれる前はほんらい仏性そのものであったのであり、最初は太陽眞火そのものであった）」のである。このため凡夫たちが大道を成就しようとするならば、「投聖接引太陽光中、纔得長生（聖人の導きにより太陽の光の中へと進んでこそ、はじめて長生を手にするだろう）」。黄天教ではこのため普明を太陽、その妻の普光を月とあがめ奉った。普明夫婦は死後、埋葬地に十三層の塔が建てられ、

日月塔または明光塔とよばれた。やがて歳月が経つにつれ、ある種の修煉の内容が、次第に修煉、兼、教主を崇拝する儀式となった。顔元の言葉によれば、明代から、黄天道は「喚日光叫爺爺、月亮叫奶奶(太陽を父といい、月を母とい)」い、また「毎日三次參拜(毎日三回拝礼)」していた¹⁴⁾。清中葉になると、直隸総督の史貽直の奏摺には、黄天道が「以毎日三次朝日叩頭、名曰三時香。又越五日將行道之事默禱天地、謂之五後願(毎日三回太陽を伏し拝み、三時香とよんでいます。また五日ごとに修道のことについて天地に対し黙禱し、これを五後願とよんでいます)」と記録されている¹⁵⁾。

実のところ、こうした修行内容は道教の中に根拠を見いだすことができる。早期の道教は気を服用し、精を大切にし、精・気・神の煉養を主張した。気の服用からは次第に太陽・月・中和の気を服用することで寿命を延ばすことへとつながった。そのため『太平経』は「元氣有三名、太陽・太陰・中和。形體有三名、天地・人(元氣には三つの名がある。太陽・月・中和である。形体には三つの名がある。天地・人である)」というのである。三気は凝固して日月星の三光となり、「凡物與三光相通、並力同心、共照明天地(万物は三光と通じ、力を合わせ、心を一つにし、共に天地を照らし出す)」。哲学的にいえば、これは道教の早期の天人合一思想であり、内修の面からいえば、日精月華や、天地の三宝を服用する先蹤である。その後、『黄庭経』には修煉の際、日月を存思したり、服気や導引したりする体系的な理論が現れる。唐代の司馬承禎「服氣精義論」では日月や臟腑を存思し、導引や気を廻らせることにより、各種の病気を治そうとする。宋元時代になると、淨明道や日月を崇拝する風潮が盛んになり、さらには太上老君は日月の神々に促されて忠孝の道を伝えたと考えられるに至った。道教経典には『高上月宮太陰元君孝道仙王靈寶淨明黄素書』などの経典が現れるが、こうした経典は黄天道『太陰生光了義宝卷』といった教義の思想の直接的な来源のひとつである可能性が高い。道教は天人合一という哲学思想により天地万物の生成の理を解明し、人体のさ

まざまな生命現象に重ね合わせようとする。これは必然的に天地日月への崇拝を、煉養思想の有機的な構成要素として組み込ませることになった。黄天道もまたこの枠組みを超えることはない。もちろん天地日月への崇拝は多くの宗教に共通する内容ではある。例えば中国で千年近く流行したマニ教は日月を崇拝し、光を崇め、中国本土の民間宗教に対してもやはり影響を及ぼした。だが結局のところ、深い煉養に関する要素を持っていなかったということが、中国でマニ教が根付くことが難しかった根本的な原因のひとつであろう。また黄天教と直接的な授受関係にあったものに、玄鼓教とよばれる教派がある。この教派は子時に北に、午時に南に、卯時に西に、酉時に東に向かって四つの時刻に朝拝焼香する。こうした教派は明中葉に存在したが、無為教の五部六冊の経巻の中で邪説として排斥されている。

黄天教が現れると、京畿・直隸・山西一帯で大きな教勢を誇っただけでなく、江浙一帯にも伝播し、長生教と名を改めた。長生教の開祖は汪長生で、教内では黄天教第十祖として尊崇された。『三祖行脚因由宝卷』には、汪長生は「往龍虎山與天師會道(龍虎山へ赴き張天師により道を理解し)」、「天師以顯法十二部、付與長生(天師は十二の法を示して長生に与えた)」と記されている。この記載が信用のおけるものであるかどうかについてはさらに裏付けが必要となろう。清代の檔案の記録によると、長生教のいくつかの特徴を知ることができる。

子孫教、又名長生道。男曰齋公、女曰齋娘。尊彌勒佛爲師、倡言入道之人身後俱歸西天、以今世功德之淺深、定來生功名富貴之大小……又令人閉目瞑心、號爲清淨。更有詭稱身到西天目睹佛菩薩及種種奇異佳境、即爲來生享受之地也。(硃批奏摺) 乾隆十三年三月初八日浙巡撫顧琮奏摺

子孫教は、またの名を長生道ともいいます。男は齋公、女は齋娘といい、弥勒仏を師として尊崇し、入道した人は死後、すべて西天へ行き、今生の功德の深淺により、来生の功名や富貴の違いが決まると説いています……また人々に目をつぶっ

て瞑想させることを清浄とよんでいます。さらにみずから西天に行き、仏や菩薩やもろもろの素晴らしい境地を目にしたといい、それが来生で享受する地だとでたらめを述べています。

長生教は黃天道と大同小異で、外面的に仏教を尊崇し、内面的には道教的な修養を行う。信徒はいつも『普靜如来檢教宝卷』・『仏説利生了義宝卷』を唱える。清の乾隆年間中葉、信徒の無雲子が『皇極開玄出谷西林宝卷』を撰述し、経卷には「廣載萬衆、名是長生大道（広く万民を救うことを長生大道とよぶ）」といい、「傳教你、皇天道、仁義禮智。還教你、正身心、孝悌忠信（そなたに教えよう、皇天道とは仁義礼智であることを。またそなたに教えよう、身心を正すこととは孝悌忠信であることを）」といった内容が見られ、全篇を通じて内丹を修煉することを本旨とする。長生の境地を究めるといえるのは、明らかに黃天道の修煉の考え方を継承し、引き継いでいる。

無論、黃天道の影響は長生教だけではない。江南の齋教系の諸教派は、伝承では無為教つまり羅祖教の系譜を引くという。だが大乘教や円頓教の創立や伝播の過程の中で、無為教の教義の内容を改め、禪宗から内丹道へと転向し、この中ではつきりと黃天道の影響を帯びるようになった。東大乘教は有名な聞香教のことであるが、その教義を伝える経書の中にすでに『元亨利貞鑰匙經』が見え、これは『普靜如来鑰匙宝卷』の翻案のようである。しかし『皇極金丹九蓮正信帰真還郷宝卷』〔『皇極經』に同じ〕と『仏説都斗立天後会収円宝卷』、さらに『大成經』などはどれも明らかに無為教の『苦功悟道卷』といった経卷の影響を脱しており、ある種単純な精神上的の悟りから宗教実践を伴う性命の学へと至っている。もしも東大乘教の『皇極經』には禪宗と浄土教、そして内丹道を併せ持つという特徴が見られ、転換期のさまざまな痕跡を残しているというならば、円頓教の『古仏天真考証龍華宝經』〔『龍華經』に同じ〕はもはや純粹な一つの内丹書となってしまうといえる。『龍華經』第一品で説かれる内容は明白である。すなわちその

布教の目的は「找化天人、總收九十六億皇胎子女、歸家認祖、達本還源、永續長生（天人を探し出して教化し、そっくり九十六億の子どもたちを故郷へと返し、本源に回歸させ、永遠の生を手に入れさせる）」ことにある。このため「二十四品、品品談玄説妙、分分與聖合真（二十四品は、どれも深遠なることを説き、すべて聖賢と違うことがない）」のである。では『龍華經』の奥深さはどこにあるのだろうか。それは「先天眞氣凝結、結成仙丹一粒、點化群盲（先天の眞氣が凝結すると、一粒の仙丹が結ばれ、もろもろの迷妄を導く）」点であり、これは内丹道に対する最も包括的な提示である。『龍華經』にいう「出細功夫（細やかなる修行法）」とは、無生老母の伝える「真言口訣」であるという。すなわち「蘆伯點杖、鑰匙開通、這分點杖、自海底點上崑崙、共記三十二處、三關九竅、各有歩位、這便是後天出細功夫（入門儀式の際に」竹の棒で叩くことは、これにより鍵を開くのであり、こうした叩く場所は海底穴から崑崙穴まで全部で三十二箇所あり、三関九竅それぞれに決まった場所があり、これこそが後天の細やかな修行法となる）」のである。いわゆる先天の修行法と後天の細かい修行法は、無為教の系統が禪宗から道教へと接近した変化の過程を反映している。こうした変化の過程は、異なる時期の異なる宝卷の具体的な内容を分析しさえすればはつきりと了解される。

『龍華經』にはまたいわゆる十歩の修行がある。すなわち、一步「恰定玉訣、開閉存守（手訣を結んで、開閉を遵守する）」、二歩「先天一氣、氣透中宮（先天の一氣をつかみ、氣は中宮に達する）」、三歩「卷起竹簾、回光返照（竹簾を巻き上げ、回光返照する）」、四歩「西牛望月、海底撈明（西牛は月を望み、海底に真珠を掬う）」、五歩「泥牛翻海、直上崑崙（泥牛は海を越え、直ちに崑崙に上る）」、六歩「圓明殿内、性命交宮（円明なる殿内に、性命が一つとなる）」、七歩「響亮一聲、開關展竅（一声が響き渡り、関が開き竅を通じる）」、八歩「都斗宮中、顯現緣神（都斗宮に、元神が出現する）」、九歩「空王殿裡、轉天法輪（空王殿にて、天法輪を転ずる）」、十歩「放去收來、親到家郷（放去収来し、親ら家郷に到る）」というものである。この十歩

の修行は『龍華經』の作者による内丹の修行の具体的な過程とみずからの体験を描写したものであり、決して煉成により根源へ遡及するという内丹道の枠組みを超えることはない。その哲学の本体論は、説き方としては道教とは異なるとはいえ、故郷へ帰るといふ浄土宗の色合いを帯びたものを道教のいう無極本元へすげ替えたものに他ならない。こうしたやり方は円頓教だけがそうだったというわけではなく、民間の世界ではよく見られるものであった。円頓教は明末に生まれ、清代に隆盛を見せ、創教は北直隸で、江南から西北諸省で興隆し、その伝播は非常に広範にわたる。清末期の先天道や一貫道とともに大乘教と円頓教の一派から分かれたが、両教の修行法からは明白な黄天道の影が窺える。

齋教の系統は江南から台湾へ分布し、先天派・龍華派・金幢派に分けられる。金幢派は王森の東大乘教から直接分かれ、龍華派は齋教の姚文字の一派から分かれ、先天教は大乗円頓教の遺脈である。全体的な体系は羅祖の無為教を外れることはないものの、数百年にわたる伝承の過程の中で異なる系統の宗教へと変化していった。ただ変化がどんなに大きくてもやはり一致するところもあり、それはどれも道教の煉養を修行の中心的内容とする点である。例えば金幢教には、『懸華宝鑑』・『多羅經』といった十数種類の経巻がある。そのため『台湾仏教篇』の作者が「仏道儒三教の思想を一つにまとめ、神仙道の精気神の煉成を力説した」というのは見識あるものといえよう。⁽¹⁶⁾

明代は民間宗教の教理体系の創造が成熟を迎えた時代であり、もろもろの大きな宗教はほぼすべて京畿のある北直隸および山東・河南で産まれた。清代は明代の遺風を継ぎ、専制的な政体による圧迫の下、さらに秘密めいた様相を呈するようになったが、それでも信仰の内容はあまり変化しなかった。清代、華北地区には最も大きなふたつの教派があった。八卦教と一貫道である。

八卦教は八卦九宮という理論に基づき、それに対応する厳密な組織体系を作った。こうした体系は清初の康熙年間に開祖の劉佐臣により創始され、農村や市鎮

で多く活動した。劉氏の創教の時の經典に『五聖伝道』すなわち『五女伝道宝卷』、および『稟聖如来書』・『錦囊神仙論』・『八卦図』などである。その中でも『五聖伝道』の影響が最も大きい。現存する中日両国の異なる版本の『五聖伝道』から分かることは、それが内丹を修煉し、長生不死を求める經典であるということである。経書には観音・普賢・白衣・魚藍・文殊の五人の菩薩が農村の機織りの女性に変化し、機織りの道理を借りて道教の内丹派の奥深い道理を説く。その中の一つには、「道也者不可須臾離也、可離非道也。道不遠人、人自遠矣。蓋大道現在目前、何須外求、只知率性而矣。(道なるものはわざわざかばかりも離れることはできず、離れることができるならばそれは道ではない。道は人から遠ざかることはなく、人がみずから遠ざかるのだ。およそ大道はいま目の前にあるというのにどうして余所に求める必要があるのか。ただ性に率うことを理解するだけなのだ)」という。ではどのように修行したらよいのだろうか。『五聖伝道』はいう。

修身如同去紡棉、莫把功夫當等閑。未訪先尋清淨地、要把六門緊閉關。紡車放在方寸地、巍巍不動把脚盤。知止而後方能定、定而後靜而後安。

修行はあたかも綿を紡ぐようなもの、修行をなおざりにしてはならぬ。まだ探していないのならばまず清浄なる場所を見つけ、六つの門をしつかり閉ざせ。紡ぎ車を方寸の地「心の喩え」に置き、どつしりとあぐらの上に据え付けよ。止まるを知りてはじめて安定し、安定すれば、静かになり安らいだ状態になるだろう。

修行者が完全に静なる状態に入ると、静中に動が生まれ、体内にひとかたまりの気が廻るようになり、それはあたかも「撥動風車法輪轉(風車を回転させるように法輪がまわる)」かのようであり、「靠尾閭、透三關、透出雲門天外天(尾閭から三關を突き抜け、雲門から抜けだし天の外へと飛び出し)」て、「當頂一線透三關(頭頂へとまっすぐに三關を突き抜け)」、小周天という修煉の段階に到達する。内丹の修行者は火候、つまり修煉の際の動静や進退、抽添といった訓練に十分注意するが、劉佐臣はこれも糸を撚り綿を紡ぐのと同様の道理であると考えている。糸を

撚るには糸の粗細や速度を把握しなくてはならず、糸を均等に「接接續續不減斷（ずっと途切れることない）」ようにせねばならない。内丹の修煉も一つのプロセスを持つ。すなわち、体内の陰陽を和合せ、水火既済の状態にして、動静を適切にして、煉精化氣・煉氣化神という段階まで進み、精・氣・神を「丹芽」へと結ばせるのである。だがこうした結果もまた糸を紡いで「結出蟠龍穗（蟠龍穗を紡ぎ出す）」のと同様、まだ未完成品である。糸はより長い糸へと撚り、そしてそれを織ることで布にせねばならず、丹芽は丹田で温養し、元神によりひそかに運搬され、慎重に護持されねばならない。心火の急緩は自然に任せ、大薬が純粹な陽になれば、陰なる精はなくなってしまう。この時、あたかも糸がもはや紡がれ布が織りあがると同じである。機^{はた}が止まると無為の境地に至り、煉神還虚の状態になり、「透出元神（元神へと超脱し）」、「透出崑崙（崑崙へと至る）」¹⁷。これこそ『五聖伝道』のいう「等紡到心花現、功也圓來果也圓（心の花「慧心」が現れるまで紡ぎ上げれば、功德は完成し豊かな実りを手に入れる）」ことであり、この情景は道教の「三花聚頂」や「五氣朝元」にあたる。

劉佐臣の『五聖伝道』ではまた布を織る機や、綿打ちの弓、綿を繰る天秤架、臼を引く挽き臼の動きで人体の元気の動きと変化、そして丹が結ばれる過程をたえている。彼は「天動地静周流轉、配合人身都一般（天は動、地は静にしてあまねく流転するが、これは人の身体にそのまま合致する）」¹⁸であり、内丹を修煉することとは天地が設けた大道であり、大道を手に入れることができれば長生もまた手に入れることができると考えたのである。

八卦教の内丹理論の華北地区における影響力の大きさは量りがたい。二百年あまりにわたり、信奉者は数えきれず、教派の伝播の広さ、教名の雑多性は一言で述べ尽くすことはできない。しかし内丹術を行わない教派は一つもない。何代にもわたる教徒がすべて毎日三回、太陽を拝み、八字の真言を唱え、氣をめぐらせ修行する。八卦教の修行は、もはや個人の修煉という意味合いを超えてしまつて

おり、信仰する者たちを團結させる接着剤、一群の人々による生死を共にする共同的な追求となつてしまつてゐる。内丹術は現実と理想、此岸と彼岸の間にかかる一つの橋であり、一種の人生を生きる意味の追求なのであり、一種の先祖代々のためめ努力目標である。そして八卦教に類似するその他の民間の教派は長城の内外、中国の南北を問わず、どこにでも見られた。こうした宗教的な教義を反映した宝巻はほどの経巻を見ても修真養性を説き、どの巻を広げても玄妙なことがらを説いている。まさにこれらの宗教およびそこで説かれる教義内容は民衆の主要な信仰を構成し、最下層の世界にまで浸透する一種の宗教文化現象を形成した。こうした現象は今に至るまで継続しており、中国の歴史上だけではなく、ひいては世界の歴史上でもあまり見られぬものであり、研究者によるより深い検討に値いしよう。

もちろん民間宗教に対する道教の影響は内丹の修養の一つにとどまるものではない。道教の齋醮や懺儀もまたこれらの宗教に対して啓発的な作用を果たしている。例えば黄天教と弘陽教、江南の齋教の諸教派の懺儀はどれもそうである。

弘陽教は混元門とも称し、直隸広平府の人、韓太湖が明の万暦年間中葉に開いた。この教派の現存する経巻および経目は四十余种あり、明清期のさまざまな大きな民間宗教の筆頭の位置を占める。中でも懺儀の類が多くを占め、『道感』の威儀類の経懺と比較してみると、その多くが道教から取られていることが分かる。例えば黄天道は主として内丹道の理論と実践を取り入れているが、弘陽教は符籙派の影響を多く受けている。晩唐と両宋期、内丹道もまた符籙派に影響を及ぼしたため、神霄派と清微派という二つの大きな新しい教えが生まれ、「以道爲體、以法爲用（道を本体、道法をはたらきとする）」¹⁹、あるいは「内煉成丹、外用成法（内には煉丹を行い、外には道法となつて現れる）」という特徴を形成した。²⁰弘陽教もほぼこうした枠組みを超えることはなく、黄天教の懺儀『普静如来鑰匙宝懺』もやはりこうした流れに沿っている。

弘陽教は明清二王朝にわたり、ずっと独自の特徴を保ち続けた。信徒は農村や小さな集落で活動することが多く、人々からは弘陽道人または紅陽道人とよばれた。彼らの一部は道觀に住み、その宗教活動は「築壇（壇を築き）」・「設道場（道場を設ける）」ことで、人々のために齋醮を行い、幸福を祈り災厄を祓った。清の檔案によると「京東一帯、向有紅陽教爲人治病、及民間喪葬、念經發送（京東の一帯では、近頃、紅陽教が人々の病気を治し、民間で葬儀をする時、經典を読んで申っている）」と記録されており、おおよそ「偶有喪葬之家、無力延請僧道（たまたま葬式を行おうとする家で僧侶や道士をよぶことができない）」ような者はほとんど弘陽道人をよんだ。これは彼らの受け取る金額が少なかったからである。清の当局もこの教団が「打醮覓食、經卷雖多、尚無悖逆語句（齋醮を行って乞食をする。經典は多いとはいえ、そこに謀反の言葉はない）」と認識していた¹⁸⁾。

弘陽教とよく似た教派にやはり一炷香教があり、まとまった經卷はないものの、口移しで伝授される類似の道情の歌詞を多く持つ。信徒の多くは各地に雲遊し、「説唱好話（語りと唱を交えて説法した）」¹⁹⁾。また農閑期には、干し飯いと道場の楽器を携えて、一つの村に集まった。こうした道場の儀式は簡単で、正式な道場のような厳かでもないものしい雰囲気を持たなかった。歌われる内容の多くは『父母恩理応賛念』のような極めて世俗化した歌詞で、木魚と鼓板を叩く音に合わせて歌い、その雰囲気は気楽で楽しげなものであった。こうした道場は、宗教的感情を歌いあげて生活の緊張を和らげ、同じ教派の友人たちと集まることを目的としている。今でもまだこの教えは河北と山東で広まっており、人々に喜ばれている。

三. 宝卷の煉養思想と道教との違いについて

まず民間宗教の中に煉養思想が現れるのは、内丹道が道教の主流となった後のことである。道教の煉養思想は先秦に始まり、南北朝にその姿を現した。唐末・

五代・兩宋の時期には内丹道は大いに興隆し、体系は完備し、煉丹炉の火が純青になるかのようにその極致に達した。唐末・五代の鍾離權や呂純陽はそれまでの丹法を受けつぎ、南北二宗を開き、書物を著し教説を立てた。すなわち張伯端『悟真篇』・石杏林『還源篇』・薛道光『復命篇』・陳泥丸『翠虚篇』や、また全真七子による大量の著述であり、張三丰の『玄譚集』、さらには明中葉の尹真人の弟子の手による『性命圭旨』など、数百年にわたり中国における内丹思想の繁栄を生み出したのである。道教の内丹の煉養術が隆盛しなければ、民間宗教のもろろの新しい形の教派が現れる歴史的な機運は生まれなかっただろう。宋元時代の白蓮教・白雲宗・マニ教はその時期における民間宗教の中心であったが、その後衰退する要因がもとと多かった。さらに重要な要因として内丹道の煉養思想を中心とする新しい形の民間教派が大量に出現したということにより、それらに取って代わった結果、信仰を中心とする領域において多くの民衆により優秀なものが選択され、劣ったものが淘汰されていくという必然的な趨勢ともなった。

新しい形の民間教派と大量の宝卷の出現は、正統的な道教の修行の特徴と無関係ではない。歴代の高德の道士たちは、ほとんどが世俗に背を向け、一心に修行した。伝授関係においても、単伝による秘授であったり、あるいは教派の輩行により嫡流の流派や信用できる弟子に伝えたりしている。また活動する場合には寺廟・宮觀に依拠することが多く、俗世から隔絶し、凡俗から超脱していたといえよう。だが最初の民間宗教の創始者は全くそうしたあり方とは逆であった。彼らが依拠したのは広大な下層社会であり、彼らが目の当たりにしたのは生を求め、死を恐れる無数の民衆であったのであり、どこであれ師友がいれば求め行き、經卷を著した。宗教上の煉養の修行についても、個人や信徒の修行の需要に応えるだけでなく、それはまた教勢を拡大し、教団を堅固にし、さらには教義を伝える一種の伝達手段でもあった。ある教派では、自分の教派の印刷所や講經房を設けていた。經卷の理解については往往にして信徒の教中における地位を決定した。

明中末葉には寄り集まって経巻について談義するのが一種の風習となっていた。「四方各有教首、謬稱佛祖、羅致門徒。甚至皇都重地、輒敢團坐談經、十百成群、環視聚聽（各地に教首がいて仏祖を騙り、門徒をよび寄せている。挙句の果てには皇都や重要な土地でも集まって座り、経巻について談義し、何十人何百人と寄り集まってはそれを見聞させてい）」たのである。⁽¹⁹⁾

またあまった金がある時には、道観を修理することで伝道したり、祠を建ててわが身の平安を祈ったりし、「邇來淫祠日盛、細衣黃冠、所在如蟻（以来、淫祀は日に日に盛んになり、法衣や道冠を身につける者たちは蟻のように満ちあふれ）」、役所は次のように厳しく禁じざるをえなくなった。「今後敢有私創禪林道院、即行拆毀、仍懲首事之人。僧道無度牒者、悉發原籍還俗（今後、勝手に禪寺や道院を建てれば即座に取り壊し、さらに首謀者を処罰せよ。僧侶や道士で度牒なき者は全員、本籍を明らかにして還俗させよ）」。まさにこうした歴史的な条件の下で、僧侶や道士たち、あるいは僧道を名乗る者たちは、やがてみずから経書を作成し、教門を開き、祖師を名乗り、道術を伝えることとなった。こうして彼らは正統な仏教・道教とは異なるさまざまな宗教、そしてまた、上には教主とその家族、下にはそれぞれの村や鎮のネットワーク、いくえもの教団が互いに維持し合う比較的穏やかな宗教組織を作り上げた。またここから発展して、多くの人々をひとつに束ね、各地を一つにまとめる大きな教派が出現したのである。明清時代の正統的な仏教が衰退し、民間宗教が興起したのも道理で、こうした民間宗教の興隆には合理的な理由があったのである。これに伴い、宝巻の流行は下層社会である種の特異な宗教文化の雰囲気醸成ようになった。こうした雰囲気の中で、道教の持つ生命力はまたある新たな形を取って高まりを見せることとなったのである。

次に宝巻の煉養思想は雑然でありつつ豊饒であり、道教の煉養の真の精神に合致しつつも、玉石混交であったためさまざまな弊害が生まれるという現象を引き起こした。

宝巻と道教の煉養思想について（馬（松下 訳））

張伯端はかつてこのように述べている。「老氏以修煉爲眞、若得其樞要、則立躋聖位、如其未明本性、則猶滯於幻形（道教は修煉を真理とし、もしその要諦を理解したならばたちまち聖なる境地へと至るだろうが、もし本来の性を理解しないならば依然として幻軀にとらわれる）」。また丘処機も修行者の心が不純であれば魔はその身に降りかかるのであり、あわせて「十魔君」という思いがあると指摘している。一部の民間宗教「宝巻」の修煉内容は、あたかもこの病を患っていると指摘している。非常に大きな影響力があった円頓教の経典『古仏天真考証龍華宝経』第八品には得道者が、元神が竅より抜け出る時に遭遇するさまざまな幻を描いている。例えば「天宮幻境、四面街道、金繩界記、玻璃河中有金銀・琉璃、樓臺殿閣、珊瑚階砌、無邊聖景（天界の幻境は全ての街が金の縄で区切られ、玻璃の川には金銀・琉璃があふれ、高殿や樓閣は珊瑚の階段を持ち、果てしない神聖なる景色が広がっている）」のを見たり、また無生母・古世尊・釈迦仏・弥勒仏に遇ったり、蟠桃会で金身「仏の身体」になったりするが、これらはすべて丘処機が『大丹直指』で述べる富貴魔や聖賢魔といった類に属する。さらにひどいものになると、少数の修行者は奇矯に走り、ついには壮大な野心を懷くようになり、世界は彼の想像の制御下にあるのであって、自分は天意を代弁していると思ひ込み、幻想の中で世界の主宰者となってしまう者たちもいた。もしもさらにこうした幻想を現実化しようとするならば、容易に「帝王を称する」ような頭目の道を歩むことになる。明・清から近現代に至るまで、こうした連中は数多く現れたが、結局、その多くが悲惨な結果に終わった。

道教では、修行者は外の世界に目を向けないではじめて道を進むことができると考える。もちろん張伯端や丘処機なども「調神出殻（神を調べて殻から抜け出し）」、「乘風履雲（風や雲に乗り）」、「永却長生不死（とこしえに長生不死となる）」ことを主張する。だが彼らや多くの高德の道士たちの「煉神還虚」の説には奇怪

な説明はなく、「合三才異寶而爲自然道也（精氣神の三つの素晴らしい宝を一つに合することが自然の道である）」『大丹直指』巻下」という。これこそがまさに道教といくつかの民間宗教の、煉養における根本的に異なる部分である。すなわち一方は清虚や無為を貴ぶという自然の道に立脚しているのに対し、もう一方は世俗の欲望と追求に満ちているのである。後者がそうである理由は、また社会がそうさせたということでもある。もともと、かなり多くの民間宗教の活動家たちの中にもまた高邁な探究心を持つものがいた一方で、正統な道士の中にもやはりどうしようもない者がいたのであり、一概に論ずることができないことも指摘しておかねばならない。

三つ目としては、哲学的な観念の上から宝巻と道教との違いを簡単に概括することはできないということである。道教は、その哲学および煉養とが、あたかも煉丹の炉の中で一体となっている。それは本源への回帰であり、それは人がその身そのままに死から離脱して生を希求するプロセスの表現である以上、その哲学的な根拠はやはり老子の説く人の道から永遠の道への回帰を越えるものではない。それは人類や社会、自然との調和の表現であり、根源性から多元性へ、そしてまた多元性から根源性へ回帰するプロセスの表現なのである。一部の民間宗教家と彼らにより撰述された宝巻はこうした考え方に立っている。

だがある種の体系だった天道観をもつ一部の民間宗教も存在した。そうした天道観はまた内丹の煉養術と一体化し、一種の極めて吸引力を持った社会政治的な視点や、一種の反伝統的な思想へと発展した。すなわち「三教応劫」思想である。三教応劫思想は、『弥勒下生経』などの仏教經典に、また時代としては両晋・南北朝時代に淵源を持つ。後に仏道二教が相互に影響しあうようになると、民間宗教がそれらを混成することにより成立した。ただし現在残る資料から見れば、明代になってこうした天道観ははじめて民間宗教の煉養思想と融合している。比較的体系的な三教応劫思想は、かなり早くから黄天道の諸経の中に見える。

『普明如来無為了義宝巻』三十五品にいう、

三世古佛、立於三教法門、三世同體、萬類一眞、九轉一性、乃爲三周說法人間、譬喻過・現・未來、三極同生。

三世の古仏「過去燃灯古仏・現在釈迦文仏・未來弥勒尊仏」は三教の法門に立った。三世仏は一体であり、万物は一つの眞であり、九たび転ずれば一つの性になる。そこで三たび人の世で説法したが、これは過去・現在・未來の三極「無極・太極・皇極」がともに生じるということを喩えている。

同経三十三分にいう、

三元了義、無極聖祖、一佛分於三教。三教者乃三佛之體、過去燃燈、混元初祖、安天治世、立下三元。

九十六刻内按九十六億人緣。過去佛度了二億、此是道尼。見在佛度了二億、乃是僧尼。釋子後留九十二億、皇極古佛本是聖人轉化、全眞大道乃在家菩薩、悟道成眞。

三元了義「普明如来無為了義宝巻」・『太陰生光普照了義宝巻』・『仏説利生了義宝巻』が説く無極聖祖という一仏が三教へと分かれた。三教とは三仏の本体であり、過去の燃灯仏、すなわち混元初祖は、天下を治め、三元を打ち立てた。

九十六刻とは九十六億人の縁分に基づく。過去仏は二億の人々を救った。これは道尼である。現在仏は二億を救ったが、これが僧尼である。僧尼の後には九十二億が残り、皇極古仏はもともと聖人が変化したものであり、全眞大道は在家の菩薩であり、悟道して仙人となる。

『普明如来鑰匙宝巻』ではこうした考え方はさらにはつきり次のように述べられている。

無極化燃燈、九劫立世、三葉蓮、四字經、丈二金身。太極化釋迦佛、一十八劫立世、五葉金蓮、六字經、丈六金身。皇極化彌勒佛、八十一劫、九葉蓮、十字經、丈八金身。

燃燈佛、掌教是青陽寶會。釋迦佛、掌紅陽、發現乾坤。彌勒佛、掌白陽、安天立地。三極佛、化三世、佛法而僧。三世佛、掌乾坤、輪流轉換。

無極の時代に燃灯仏が現れ、九劫のあいだ世を治め、三葉の蓮が現れ、四字の經文を唱え、その姿は丈二の金身であった。太極の時代には釈迦仏が現れ、十八劫にわたり世を治め、五葉の金蓮が現れ、六字の經文を唱え、その姿は丈六の金身であった。皇極の時代には弥勒仏が現れ、八十一劫、九葉の蓮、十字の經文、丈八の金身となる。

燃灯仏が掌るのは青陽宝会である。釈迦仏は紅陽宝会を掌り、天地が現れた。弥勒仏は白陽宝会を掌り、天下を治める。三極の仏は三世を教化したのであり、それは仏法僧による。三世仏は天地を掌り、めぐりめぐって移りゆく。

最終的に体系の確立は、「三仏」の上に無生老母または無生父母が出現することとでなされた。こうした体系の中では、人類は無生父母あるいは無生老母により創造され、「無生母」は天地陰陽を創造し、「嬰兒・姪女」をはぐくみ、九十六億もの「皇胎児女」――すなわち人類を産み出したのである。人類はもともと美しく壮麗な彼岸の世界で生活していた。だが罪と過ちのために、老母により東土の塵世へと打ちやられ、ことごとく本性を見失い、また尽きることない劫難に遭うことになったのである。無生老母はそこで耐え難く思い、使者をこの世に使わし、「發靈符、救度人民（靈兆を現し、人々を救わんとした）」。彼女はそれぞれ青陽の劫・紅陽の劫・白陽の劫に燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏をこの世に降した。青陽と紅陽の劫の時にはそれぞれ二億の人々を救済した。紅陽の劫が終わり、白陽の劫が興る時、人類は空前の苦難を蒙ることとなり、この上ない法力を持つ弥勒仏が降り、人類を壊滅より救い、九十二億の「残されし靈」^{みたま}を救済し、ふたたび彼岸へと返そうとしたのである。

では人類はどうしたら帰ることができるのか。そのためには有縁の人にしなければならぬ。また有縁の人は内丹の術の修煉を通して「真道の玄機」をつかまね

ばならない。この際、優れた師の教示を受け、教門に入らねば、「顯真機、明大意（真なる機を明らかにし、大いなる意思を理解）」し、「訣点（導き）」を与えられることはできない。日夜精進することで、本性は次第に明らかにになり、迷いから光明へと帰り、天真の性へと回帰し、円明なる本体を得て、もう一度、新たに「古家郷（ふるさと）」と帰り路を理解するのである。これがすなわち『皇極金丹九蓮正信婦真還郷宝卷』にいう、「若有縁、遇親傳、金丹大道、點玄關、明開閉、養氣存神。久久的、加精進、觀空靜坐、功夫到、心悟明、見性明心。神爲性、氣爲命、本原無二。從無始、至如今、一氣穿通（もし縁あらば、直々の伝授にあずかり、金丹の大道はその玄妙なる関門を教示されて、その開閉を理解し、氣を養い神を存することができよう。ながらく精進し、空を觀想して靜坐し、功夫が十分になれば、心は了悟し、見性し心をはっきり理解する。神は性であり、氣は命であり、本来それらは一つのものである。始原より今にいたるまで、一つの氣が貫通しているのだ）」ということなのである。そして最終的に修煉を重ね、「眞空出竅（眞空となって肉身から抜け出て）」、凡と聖が一つになり、生死を打ち破り、本源へと帰り、家郷にたどり着くことができる。できれば、俗世に生まれ落ちる前の天真の性、本来の姿を取り戻すことができる。三教応劫救世思想は、このように民間宗教の内丹術の修煉とつながっているのである。こうした教義は黄天教・聞香教・八卦教・一貫道などの多くの種類にわたる教門の基本的な教理となり、まぎれもなく下層の苦難にあえぐ人々に対する非常に大きな吸引力を持つこととなった。またそれは一部の民間宗教による反伝統的思想の中心的内容となり、道教の持つ天人合一思想との明らかな分岐点ともなったのである。

註

- (1) 『明神宗実録』、卷五三三、万曆四十三年六月。
- (2) 『明神宗実録』、卷五九四、万曆四十八年五月。

- (3) 『明神宗実録』、卷五八〇、万曆四十七年三月。
- (4) 清・黄育榎『破邪詳辯』卷一。
- (5) 清・黄育榎『破邪詳辯』序。
- (6) 『南宮署蹟』卷四。
- (7) 『軍機処録副奏摺』嘉慶二十一年七月山東巡撫陳預奏摺。
- (8) 『軍機処録副奏摺』乾隆三十九年八月二十日江蘇巡撫薩載奏摺。
- (9) 『軍機処録副奏摺』嘉慶十九年五月二十二日太保大学士董浩奏摺。
- (10) 清・顔元『四存編』存人編、卷二。
- (11) 『普明如来無為了義宝卷』第一分・第二分。この経巻はロシア・サンクトペテルブルグ東方学研究所に収蔵されている。
- (12) 『普明如来無為了義宝卷』第十九分。
- (13) 『普明如来無為了義宝卷』第十八分。
- (14) 清・顔元『四存編』存人編、卷二。
- (15) 『軍機処録副奏摺』乾隆八年四月初九日署直隸總督史貽直奏摺。
- (16) 『中国仏教史論集』（八）「台湾仏教篇」の附録「台湾の齋教由来」、台北、大乘出版社、一九七七。
- (17) 『道法会元』卷六十「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」。『道法会元』卷七十「玄珠歌注」。
- (18) 『軍機処録副奏摺』嘉慶二十四年六月二十三日山東按察使温承惠奏摺。
- (19) 『明神宗実録』卷五九四、万曆四十八年五月。
- (20) 『明光宗実録』卷三、泰昌元年八月。
- (21) 宋・張伯端『悟真篇』序。

作者プロフィール…馬西沙、一九四三年北京市生まれ、中国社会科学院世界宗教研究所道教与民間宗教研究室もと主任・研究員、博士研究生指導教員、中国社会科学院榮譽学部委員。代表的な著作に『清代八卦教』（中国人民大学出版社、一九八九）、『中國民間宗教史』（上海人民出版社、一九九二年、共著）、『中国道教史』（上海人民出版社、一九九〇、共著）等。

凡例

- ・原題は「宝卷与道教的煉養思想」。初出は『世界宗教研究』（一九九四第三期、中国社会科学院、一九九四）。後、『古代中国民衆的精神世界及社会運動』（中国社会科学出版社、二〇一三）所収。ここでは後者を底本とした。
- ・文章は基本的に原文の標点に従う。ただし読者の便を考え、長い段落・文章についてはいくつかの段落・文章に分けた。
- ・原文は簡体字だが、原典の引用文は可能な限り旧字体に直した。
- ・「」は訳者による補足である。
- ・出典の誤りについては、著者に確認した上で一部修正したところがある。

（ば せいさ・中国社会科学院榮譽学部委員）

（まつした みちのぶ・皇學館大学文学部准教授・本センター共同研究員）

補記

本論文（日本語訳）は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））研究課題「道教の成立およびその歴史的展開に関する総合的研究」（課題番号…二四五二〇〇四六、研究代表者…松下道信）の成果の一部である。これは平成二十七年三月七日（土）、皇學館大学佐川記念神道博物館講義室で行われた同研究班主催のシンポジウム「道教史の新たな展望」で発表された。

The Precious Scrolls and the Taoist Thought of Cultivation

Ma Xisha

This paper believes that the fundamental feature of Taoism lies in the combination of profound philosophy with its cultivation practice. It points out that the Precious Scrolls of folk religion in the Ming and Qing Dynasties was heavily influenced by this feature, and that it gradually became one of the channels through which Taoism influences the low-level masses. The paper also analyses the similarities and differences in cultivation thought between Taoism and folk religions.